



Title	「我思う故に我あり」という命題における「思う」と「在る」の関係の再考
Author(s)	
Citation	令和5（2023）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和5年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな氏名	ラ イチイ LUO YIWEI	学部 学科	文学部 人文学科	学年	1 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	嘉目道人	所属	大学院人文学研究科		
研究課題名	「我思う故に我あり」という命題における「思う」と「在る」の関係の再考				
研究成果の概要	本研究の結論としては、コギト命題の確実さを否定するものではないが、デカルトの知識の2分法によりコギト命題はどのような知識なのかという質問への答えは確定しがたい、と言わざるを得ない。				

1. 本研究の概要

筆者はデカルトの『省察』を読み、「我思う、ゆえに我在り」というデカルトの言い方から、コギト命題においては、〈あらかじめ存在すること〉が〈思うこと〉の前提であると暗黙裏に自明視されているのではないかと考えた。もしこのような前提があるのなら、単に「我思う、ゆえに我在り」と言うだけでは不適切であり、むしろ〈我が在る、ゆえに我思う〉という前提により、思うという事実から、思うことを可能にする我が存在するという前提を認識する推論となる。

よって、筆者はデカルトのコギト命題が暗黙裏に前提を設置しているのかどうかを明らかにする必要があると考え、コギト命題は前提のある知識なのか、前提のない知識なのかについての哲学史上の議論をあわせて検討し、その上で独自にコギト命題の性質を探っていくという方法を取ることにした。これによってデカルトの言葉を分析した上で、コギト命題の知識としての基礎を探ると思われた。

2. デカルトによる議論の概要

周知の通り、デカルトは懷疑することが可能か否かを物差しにして、自分の知識を徹底的に疑い、絶対的に必然的に真実な知識の基礎を探究した。まず、デカルトは感官による感覚の真実さを疑問視した。錯覚とか幻覚などの経験が我々に教えたのは、諸感覚による知識は必ずしも真実でないということである。「感覚はしかし時折は欺く、ということを私は思い知らされたことがあるのであって、一度たりとも我々に瞞いたことのあるものどもをけっして全面的に信頼しないようにするのが、賢明というものである」（『デカルト著作集 2 増補版』、p. 30）。

経験的な感覚が信用できないとすれば、残っているのは人の心に内在する論理的な知識であろう。「というのも、私が目ざめていようとも寝ていようとも、二と三とを足し合わせれば五であり……」（前掲書、p. 33）。しかし、デカルトは「悪き霊」という論証で、論理的な知識すら疑える主張した。「私はそこで、真理の源泉たる最善の神ではなくて、或る邪意にみちた、しかもこの上もなく力能もあれば狡智にもたけた守護霊がその才智を傾けて私を欺こうと工面してかかっている、と想定しよう」（前掲書、p. 35）。この悪き霊が我々の思想を歪めれば、例えば数学の関数のように、もともと考えたいものが a であった場合に、欺かれた結果として b を考えるとといったことが起こりうる。このようにして全ての知識が妥当性を失えば、人間にとって必然的な知識は存在しえない。

だが、デカルトの本意は知識を否定する懷疑論にあるのではなく、知識の基礎を確保することにある。懷疑論への解決策として、「我思う、ゆえに我在り」という命題が根源的な知識の基盤として存在しうるとデカルトは考えた。いかに知識の真実さを懷疑しても、「私は懷疑する」という事実は懷疑できない。一層概括すると、たとえ私の思惟の内容全部が偽りであっても、〈私が思う〉ということは必然的な事実である。以上から、根源的な知識の基盤となるのは「我思う、ゆえに我在り」という命題であるとデカルトは主張した。

3. 問題提起

筆者は、以上のようなデカルトの議論について、「我思う、ゆえに我在り」という命題は暗黙裏に、とある前提を自明視しているのではないかと考えた。

それは以下のような理由による。第二省察において、デカルトは繰り返し「私が思うなら私は存在する」ということと、「私とは考えているものである」という主張を行っている。「私が何もの

かであると私の思惟しているであろうかぎり、私は無であるという事態をしつらえることはできないであろう」「私とは断然思惟しているものでしかなく……」（前掲書、p. 38, 41）。

このような言い方から、デカルトは暗黙裏にコギト命題の前提を設置していたことが疑われる。即ち、〈思考する前に思考者が在らねばならない〉という前提が設置されたのだと考えられる。言い換えると、行為に対して行為の遂行者が先立つということである。存在しないままで思考することはできないので、思考しているなら絶対に、思考する者が予め存在していることになる。こうして「我思う、ゆえに我あり」という命題は推論であるということになる。アリストテレスの三段論法に言い換えればこうである。大前提「思考する者は存在する」小前提「私は思考する」、結論「私は存在する」。

だが一方で、私は存在するからこそ思考するのである。〈我が在る、ゆえに我思う〉のである。それゆえ、「我思う、ゆえに我在り」という言い方は循環論法になっており、不適切であるように思われる。以上が、本研究が取り組んだ問題であり、この問題を解決することが本研究の目的であった。以下では、その具体的な内容を述べる。

4. デカルトの用語法の確認

まず、デカルト自身の用語法を闡明しておく。前述のデカルトの言葉遣いを見れば、「思う」という語が日常的な使い方よりも広く使われたことが分かる。即ち、デカルトがこの言葉を使う時に指しているのは、何かを具体的に思考することだけでなく、意識の中にある一切の思惟活動が「思う」という言葉に包含されていると考えられる。

さらに、「知識」という語について言えば、デカルトは全ての知識を二つの種類に分けている。「提示された対象に関して探究されるべきは……我々が何を明晰にかつ明証的に直観できるか、あるいは、何かを確実に演繹できるか、ということである。なぜなら、それ以外の方法では学問は得られないからである」（『デカルト著作集 4 増補版』、p. 18）。つまり、二種類のうちの一つ目は推論的知識、ある前提から論理の演繹により導き出された結果としての知識である。もう一つは直観的知識である。それは数学的公理のようなものであり、前提に依拠する必要がなく、直接に理性で把握できる知識である。「直観[という語]によって、私が理解するのは……、純粹で注意深い精神の、我々が理解するものについては懐疑の余地をまったく残さぬほど容易で判明な把握作用なのである。……理性の光のみから生ずる……演繹それ自体よりも、はるかに単純である」（前掲書、p. 20）。

本研究の主題は、コギト命題が暗黙裏に前提を置いているかどうかであった。二種類の知識の区別を踏まえるなら、前提があるならば推論的知識であり、前提がなければ直観的な知識であると言える。このように問題を整理することで、検討が容易になる。

5. コギト命題をめぐる哲学史上の議論

本研究では主な方法として、哲学史を概観しコギト命題をめぐる諸哲学者の態度を考察している。はじめに、デカルト本人によるコギト命題の表現、並びに本人のその命題への態度を述べておきたい。コギト命題を議論した著作は四つあるが、それぞれの言い方は以下の通りである。

『精神指導の規則』(1628): 「誰もが、自分が存在すること、自分が思惟していること……またこれに類似のことを知的に直観できる」（『デカルト著作集 4 増補版』、p. 20）

『方法序説』(1637): 「「私は考える、ゆえに私はある」という命題において、私が真理を言明していることを私に確信させるものは、考えるためには存在せねばならぬということをきわめて明

晰に私が見るということ」（『方法序説ほか』、p. 42）

『省察』（1641）：「力もあればこの上もなく狡智にもたけた欺瞞者がいて、故意に私を常に欺いている。彼が力のかぎり私を欺こうとも、彼はしかしけって、私は何ものであると私の思惟しているかぎりには私が無であるという事態をしつらえることはできないであろう」（『デカルト著作集 2 増補版』、p. 38）

『哲学原理』（1644）：「ことを考えるわれわれが無であると想定できないのである。なぜなら、考えるものが考えているまさしくそのときに存在しないと解するのは矛盾しているからである」（『方法序説ほか』、p. 132）

「学者たちは、極めて単純であり自明であるものを論理学上の定義によって説明しようと企てる、という誤りをおかした……。したがって、「私は考える、ゆえに私は在る」という命題は、あらゆる命題のうち、順序正しく哲学する者なら誰もが出会う、最初の、最も確実な命題である」（『方法序説ほか』、pp. 134-135）

以上からすると、コギト命題が推論的知識なのか、直観的知識なのか、おそらくデカルト本人も躊躇っている。デカルトは『精神指導の規則』と『省察』、『哲学原理』においては、暗示的或いは明示的に直観だと見なす傾向を見せた。しかし一方、『哲学原理』と『方法序説』においては、推論だと考えているような言い方もしていた。さらに、この躊躇いが時間の順序によるのではなく、むしろ最後の哲学著作の『哲学原理』ではこの躊躇いが矛盾をもたらしていることが明らかなように思われる。

次に、他の哲学者の意見に関してだが、推論と考えているのは少数派である。代表として、デカルトの同時代の批判者であるガッザンディは、コギトとは三段論法の産物であると主張している。これに対して、「我思う、ゆえに我在り」とは直観であると主張している哲学者のほうが多数派である。有名なのはデカルト哲学を合理論的に発展したとみなされているスピノザの『デカルトの哲学原理』であるが、現代の論理学者ヒンティッカも、「我思う、ゆえに我在り」は推論ではないと主張する。

以上の哲学史上の経緯を踏まえてみると、どうやらデカルト側からも哲学研究者側からも、コギト命題とはどのような知識なのかという質問に答えうる統一的な意見を得られそうにない。そこで次にコギト命題の内容を改めて論理的に考察してみて、直観的知識か推論的知識かを再考していく。

6. コギト命題の再検討

第一に、コギトが推論的知識として成り立つかどうか考察していく。

推論の場合、コギト命題は〈思うものは存在する〉という前提による結論である。このとき、「存在」という言葉は二重の意味を含んでいる。具体的には、感覚により現実的に存在することと、精神的に存在することである。例えば神の存在は想像できるにもかかわらず、必ずしも神が感覚で捉えうるものとして現実的に存在するわけではない。

感覚による現実的な存在という概念から考察してみれば、「我思う、ゆえに我在り」という命題によって証明された〈我〉は、感覚による現実的なものではない。なぜなら、感覚による現実とは上述した方法的懐疑により否定されるからだ。確かに、経験的には思惟することとは存在者が思惟することであると経験的には言えるが、もし今までの経験が夢であり、悪き霊に欺かされた結果であれば儚くなるのである。それゆえに、経験的な意味で現実的な思考者の存在という前提は成り立たない。

一方、思考者の存在が経験的現実ではなく、デカルト本人の精神世界でデカルトが疑っていることである場合を考察していきたい。デカルトが、ただ自分が思惟としての存在者であることしか知らない状態であるとしよう。つまり、今残っている確実な事実が私が考えるという事実だけで、何らの前提も予め提供されず、思考するものはこの疑っている者だけである。「思うものは存在する」という言い方をこのように解するなら、思うものは私だけであるからこそ、思うものとしての我が存在するという命題になる。すなわち、「思うものは存在する」という前提は「我思う、ゆえに我あり」という命題自身になってしまうのである。つまり、「我思う、ゆえに我あり」の前提としては使えないのである。というのも、使えば循環になってしまうからである。以上の分析により、推論的知識は前提が必要であること、また必要とされる前提が実際には提供されえないという条件を合わせると、「我思う、ゆえに我あり」という命題は推論的知識ではありえないことになる。

第二に、直観的な知識として成り立つか否かに関して考察する。上述した定義により、直観とは前提なく理性で直接に把握できる知識である。この定義によりコギト命題が直観であることは疑われると筆者は考える。その理由を、以下コギト命題の成り立ち方を分析しながら論じていく。

「我思う、ゆえに我あり」という命題においては、三つの意味をもって「我」という言葉を使った上で、結論が出されていると筆者は考える。最初に、まだ疑っている意識自体が知識の妥当性を思惟する時、考えて（疑って）いる意識が一番目の私として現れている。次に、疑う対象がこの自分を指す時、能動的に疑う一番目の我とは異なる、受動的に疑われる二番目の我が生じてくる。最後に、二番目の考えている我自身が主体として考えている我と、対象化された、且つ考えている主体の我によって考えられる我とが同一であることを認識した時、過去と未来のあらゆる我を統一した、持続して存在している靈魂もしくは思惟実体としての、第三の我が現れてくる。以上の三番目の統一の我により、今疑っていた意識による疑いが晴れ、考えている我が「我思う、ゆえに我在り」という知識の確実性を得るに至る。正にこの時、先ほどの疑っていた意識を考えることを通じて、「そうか、先ほどの意識が統一的な意識として存在することこそ絶対的な知識だといえるのだ」と意識するのである。

この統一的な我をきちんと認識した上で、初めて「我思う、ゆえに我在り」といえるのであろう。主体として考えている私が、対象化されており、考えられる対象としての私と同一的でなければ、「我思う、ゆえに我在り」とは言えなくなるからだ。考えている実際に存在している主体があつてこそ、存在者が証明されうる。同一的な思考者がなくなってしまうと、デカルトの意識の中に持続している考えは何らかの知識ももたせないではないか。デカルトの証明では思考があるからこそ、思考に依存する主体もあるとされる。この主体は上述の統一的な主体であり、思考を可能にする前提である。

もしこの統一的な主体がなければ、たんなる考えはするが統一性のない我と、考えられる思惟対象としての主体しかなく、「我思う、ゆえに我在り」が証明されえない。なぜなら、統一性のない主体のできることは考えることだけであり、どれだけ考えていても、考えられる内容の確実性を確認できず、全て悪き靈に欺かれた嘘かもしれないからである。また、対象化され考えられている我は、単なる思惟の内容でしかなく、ゆえに夢の一部である可能性から逃れることができず、確実な知識としての妥当性をもたらせない。この二つの我の同一性を意識することによってのみ、神ほどの力を持つ悪き靈すら歪めえないこと、すなわち「我思う、ゆえに我在り」という命題が現れてくるのである。

しかし、このように「我」が三つの意味で使われているのであれば、直接に把握できる知識かどうかは疑問視されるのではないだろうか。なぜなら、これほどのプロセスを経て得られる知識は、

おそらく直接的に把握されたとは言いにくいであろうからだ。

7. 結論

以上の哲学史的および内容的な考察により、デカルトの知識の二分法を考慮すれば、コギト命題を直観にも推論にも帰属することが難しいと判断される。よって、本研究の結論としては、コギト命題とはどのような知識なのかという質問への答えは確定しがたい、と言わざるを得ない。

参考文献

デカルト 著、三宅徳嘉ほか 訳、『デカルト著作集 2 増補版』、白水社、2001年

デカルト 著、三宅徳嘉ほか 訳、『デカルト著作集 4 増補版』、白水社、2007年

デカルト 著、野田又夫ほか 訳、『方法序説ほか』、中央公論新社、2005 年

